

價湧貴せしめ候得共、急に右濡米御拂に成り、其外も下直に賣出し候故、却て下々には米求易罷成、價も賤く成り候旨。

一、二日には我公日光御拜謁の日に候所、日光山も朔日・二日甚敷風雨、何とも御參拜難被爲成可有之由に候得共、少しも無御滞御規式の通御拜謁相濟、六日江戸へ御着被遊候。御參拜御供奥村内記・青木新兵衛・半田權左衛門御供中、荷物等は人馬支滞り、驛々殘し置致御供候に付、六日御着の後人足三百餘人、江戸より越谷・草加迄取に遣し、七日・八日迄に段々致到來候。戸田川大水にて九日比迄船出し不申候。板橋の橋も落ち、御跡より罷越候面々、浦輪・蕨邊に四五日逗留、多くは間道を経、荷物は宿々に殘し置き、船にて隅田川より淺草へ出で本郷へ歸着の事。

一、溺死御改書付の寫。川口・芝金杉・深川六萬坪等にて取上候。死骸に主有之分如左。

小石川水道町、牛込赤木明神の下、古川代町迄の内。

男百八十人。女二百三十人。男女小兒二百十三人。

目白下、關口・中里迄の内。

男百八十五人。女百七十二人。男女小兒百五十四人。

根津・下谷・金杉・淺草・廣徳寺前箕輪迄の内。
男三十七人。女七十八人。男女小兒六十一人。出家十三人。
芝杉新網町にて。

男六十八人。女三十人。男女小兒十八人。

右は死骸早速取揚候分如此。難取上候て流亡の分四百餘。於芝牛三十六匹、馬の死亡數不知候。溺死人數千八百二十九人。

一、水戸邸内にて歷々士分二十餘人、其外男女の死數不知候。馬は不殘溺死、只一疋屋上へ上り死不申候由。惣て屋敷方の分は未相知候。

一、船手より訴候分。九百七十三人。同廿四日迄に善七方にて取上候の由。

一、房州浦にて取上申分。二千五百四十八餘。豆州浦の分は未相知候。以上。

戊申 十月四日

一、前田對島直知の妻祖心來歴

牧村氏諱古那、父は勢州田丸城主兵部大輔利貞、五萬石領

す。太閤秀吉公の時、文祿元年朝鮮征伐の役に七百餘の從兵を以て罷越候所、彼國にて病死也。一女子有之、常に我高德公・瑞龍公御懇意に付、渡海の節右女子瑞龍公御養女分に被成置。其後右の趣故前田對馬直知に嫁娶被命候て、糺田五百石被下候。老後稱祖心是也。前田氏にて三男子を生す。對馬直正・熊助某・志摩直成是也。然るに直知の母儀は高德公の御娘にて、常に驕豪甚敷、其婦牧村氏と間不好候。夫婦間には別條無之といへども、以來不可然事も可爲出來とて、夫婦相談の上を以て牧村氏を京都へ遣し、白川にて町野長門守幸知へ再嫁也。其後長門守夫婦東都へ罷越候。如此仔細に付其後志摩直成を長門守へ養子にし、町野氏を稱へ候。然る所寛永十九年牧村氏祖心と稱し、大猷殿下へ御局役に被召出。則ち春日局を以て被仰渡御奉公す。祖心と稱するは此時也。正保四年・慶安三年兩度に爲御知行、武州牛込村の内を三百四十五石三斗拜領す。殿下薨御の節、祖心下屋敷の内に御牌を可奉安置の旨被命に付、幸ひ正保三年酒井讚州奉之、祖心申談じ、蔭涼山濟松寺を建立し被下置候。御知行不殘奉願候て寄附候。仍之從嚴有殿下御朱印被

下、濟松寺開基の僧水南和尚へ渡之。其後黄金・材木等拜領に付、御靈屋も建立仕候。祖心へ百人扶持被下置候。延寶三年乙卯三月病中女使近江・川崎兩人を以て、何成とも願の筋可申上の旨被仰出候。牧村は父方の苗字に御座候。其種は無御座候得共、幸ひ前田氏の孫御座候。則了心せがれ犬松と申者罷在候。是を被召出、牧村氏を名乗候様に被遊被下候はゞ、可忝旨申上候。依之祖心へ被下候百人扶持を五百俵に御直し、犬松に被下候。後兵四郎と稱する是也。同月十一日死去九十餘歳也。志摩直成入道了心は、前田美作直知第三男也。兄對馬直正知行一萬石の内千五百石令配分、微妙公へ奉仕、其節町野長門守養子に仕度旨奉願江戸へ罷越候。其後寛永二年乙丑兄對馬死去、其子長松孝貞幼少に付、同四年丁卯自微妙公被召還、一萬七千石御願置、長松十五歳に罷成候はゞ右の内一萬石相渡可申旨被仰付候。寛永二十年右一萬石、從陽廣公長松致拜領、残り七千石志摩へ被下置候。町野氏に罷在候内、堀田加賀守正盛娘と縁組申合置候。御國へ被召還候儀故、如何可仕やの旨奉伺候所、最前の通り可申合旨微妙公被仰渡、小松へ呼越致嫁娶。正